

【解説】「死ね」といわれた時代に「生きよ」と書く

新船海三郎（文芸評論家）

本書にはアジア太平洋戦争末期の、一九四三年から四五年に発表された作品のうち、戦場を舞台にしたものや、武士のありようや生と死をテーマにしたものを選んである。こういう形でまとめられるのは、周五郎の作品集ではおそらく初めてと思われる。収載できなかった同時期のものでは他に、「孫七とずんど」（一九四三年六月）、「御馬印拝借」（一九四四年二月）、「紅梅月毛」（同四月）、「荒法師」（同）、「鉢の木」（同六月）、「四五年には「勘弁記」（四月）、「ならぬ堪忍」（五月）、「友のためではない」（八月）など、本書収載の作品とテーマが重なるものもあればそうでないものもある。周五郎の作品にしては改行の少ないものが多く、戦時下の紙の統制によると思われる。初出の『日本士道記』は、一九四四年に晴南社から単行本として出版された。一万部発行と『戦中日記』にはある。

すでに一九四二年六月のミッドウェー海戦の敗北によって戦争の主導権はアメリカ・連合国軍側に移り、本土への空襲も始まって、敗色が日々濃くなっていくときである。

知られているようにこの時期、周五郎は『小説日本婦道記』で第一七回直木賞（一九四三年前半期）に推されたが辞退している。「自分としてはどうも頂戴する気持になれませんでしたので勝手ながら辞退させて頂きました」というのが言い分である。「もつと新しい人、新しい作品に」、「新人と新風とを紹介する点にこの種の賞の意味がある」などと言い添えているが、いわでもがなのことで、かえって、井伏鱒二、大佛次郎、岸田國士、永井龍男ら選考委員に対して礼を欠いている。

後年は尾ひれもつき、読者の評が最高の賞などと自身で語り、反権力、孤高の初発の出来事のように扱われもしているが、それは少し強引で整理されすぎのように思われる。尾崎士郎から「曲軒」とあだ名されたくらいへの曲がりだから、何がどうかは分からないが、ともかく気に入らない、というのが本音ではなかったろうか。

「気に入らない」でいえば、『日本婦道記』への評価があるかもしれない。これは辞退後に知るところではあるが、選考委員の選評の言葉を拾ってみると、「厳然たる婦道を鼓吹する意欲が現れている」（井伏鱒二）、「恭謙に、真摯に、今日の国家理念に確りと立脚し」（濱本浩）、「日本婦道というものに堅固な把握を持ち」（岩田豊雄）、「戦時色で煮詰められた世情に、『日本婦道記』の主題と力倆がふさわしいものに思われた」（永井龍男）とあるように、周五郎がいくら「時局便乗の小説ではない」といっても、読み手はそうは受けとらなかつたことがうかがえる。周五郎には、そういう世評に乗りたくない心理がどこかで働いたかもしれないが、不明である。

といって、周五郎が戦争をまったく忌避、反対していたと見るのは早計である。この時期、周

五郎は揺れている。

一九二六年、『文藝春秋』四月号の懸賞に応募して「須磨寺附近」で文壇デビューしたものの順風満帆とはいかず、精神的にも経済的にも窮した一九二八年の夏から秋、周五郎は東京湾北岸の浦安に暮らした。その体験は後年、「青べか物語」に結実するが、その心覚えとでもいうべき日記（青べか日記）は、皇紀紀元で記している。「二三歳の若者は当時のごく普通というよりやや右へ寄った考えの持主だったかと思われる。それが、陸軍報道班員の徴用を拒むようになって、（一九四一年一月、徴用令書が文学者に届く）。右翼系はもとより左翼からリベラル派までこぞ「バスに乗り遅れるな」と応じた徴用をどういつて拒否したのか。「小説家は小説を書いてお国のために尽くすのが本分だと思う」などという言い分が通る世ではなかったと思われ、戦後の周五郎のその言葉を鵜呑みにすることは出来ない。

ただ、一九四二年四月三〇日の翼賛選挙では、「初めて投票す、津久井龍雄也」（『戦中日記』）とあり、翼賛政治体制協議会推薦で立候補した右翼・国家主義者に投じている（落選）。周五郎の『戦中日記』公刊に尽力した研究者の竹添敦子は「監修の言葉」で、これを「思いがけないこと」としている。竹添は、四四年四月の『文学報国』のアンケートに、周五郎が「小生としては自分の書くものに依っていくらかでもその方面に役立つというよりほかに格別方策はございません」と答えていることや、同年六月の栗原悦蔵海軍報道部長との対談で、「のらりくらりと相手の誘導をかわした事」など、自分がこれまで探索した周五郎の言動には「政治や戦争から節度ある距離を保っているものが多かった」ので日記のそれには驚いたと述べている。

竹添は、「しかし、翼賛選挙は一九四二年のことであり、その後の二年で周五郎の意識が明確に変化したことも分かった」としており、ならばその「変化」はどのようなものであるのか。作家の思想は小説作品にこそ反映されると信じて、考えてみたいというのが本書の意図でもある。

収載作品を読んで痛感することは、時代背景の相違があるとはいえ、天皇への唯一無二の忠誠を唱え、忠義や滅私奉公、国家のためには死をも厭わぬものとして武士道を解釈する、太平洋戦争中に流布した「皇道的武士道」に対する違和感、異論、異見である。もっと単純に言えば、むやみやたらな「死」の拒否、である。

「生きている源八」は題名が語るとおり、いくたび戦場に出ても必ず生きて帰ってくる男の話であるが、「殉死」に描かれるのは、幕府の命によって「殉死」が禁じられているにもかかわらず、君の寵を受けた者は殉じてしかるべしとする世評に抗する、二人の若者の決然とした生き方、殉じ方である。それを描きながら作者は、「まことの武士なら生きぬけ」といわせている。何でもかんでも「死」を強いる「武士道」、さむらい観への批判を込めたと読むなら、辛辣はきわまらない。

さらに、「一人ならじ」は武田・上杉の川中島の決戦前夜、「きつと兜首を取る」「本陣に斬り込んで討ち死にする」などとおのおの戦場の臨む覚悟を披瀝するなか、ひとり「生きぬいてまいりたい」と吐露する栃木大助を通して、奉公とはどうあるべきかを問う。大助の真意は、「生きぬいてお役に立つことが御奉公」とするところにある、その点、「死は鴻毛よりも軽し」（戦陣訓）と覚悟して事に当たる心構えだったはずが、いつの間にか「死ぬこと」が至上になっている倒錯をあ

ぶり出すのである。

当時の日本軍が、「生きて虜囚の辱めを受けず」と、むやみやたらに「死」を求めたことへの批判である。

「死ぬことなど問題ではない。肝心なのはどう生きるかだ。おれは生きた、こうと信ずることを為^な遂^とげたんだ」（『夏草戦記』）、「名も求めず、立身栄達も求めず、ただ一人の戦士として黙々としておのれの信ずる道を生きる、多田新蔵とはそういうもののふなのだ」（『石ころ』）など、周五郎は「生きる」に重きを置き、思いをこめて書いている。

つねづね「死にざま」を連発している「楯輿」の神原与八郎が、関ヶ原の戦場で見たのは、「名もとどめず戦場の露と散っている、理屈も云わず、あらためて覚悟も叫ばずに……」累々たる屍体だった。「死にざまなどを考えるのは寧ろ我執」と気づく姿には、「死」を物語にして美化し、戦意の高揚に役立てようとしか考えない日本軍の浅薄を見透かした目がある。

たたかいに臨んで与八郎が妻に大坂行きを命じたとき、妻は隣に出かけるかのように平静に旅立った。跡にはいつもと何も変わらぬ日常の風景が残るばかりで、妻にこそ、明日は合戦かもしれぬという非常のなかの日常、平常が据わっていた、と描かれる。そこには、我執との対比がある。我執は、読む者が読めば戦争末期に至っても保身と特典に汲々としている軍上層部の誰かを想像させたかもしれない。

「一人ならじ」が描くもう一つは、戦闘時につきの判断で右足を橋桁と台石の間に差し入れて橋の切断を防いだものの、大腿から下を失った大助のその後である。いうなら、戦争で大けがを

負った障害者の扱いである。義足を完成させて再び戦場へ、という大助の思いを作品は告げるが、退却を決めた戦場では重傷病者に手榴弾か薬品等を与えて自決を求め、放り出したことなど、心身に深い傷を負った兵士たちへの日本軍の酷薄な処遇との違いを、ここでは読み取って間違いないように思われる。

「水の下の子」は壮絶である。「あご」とあだ名され無能のように扱われていた小弥太が、暗夜の城攻めの際に濠に落ちる。浮かびあがれば敵の標的になるか、場合によっては味方が発見されるが、小弥太は浮かんでこない。戦闘の後、調べると小弥太は石を抱いて沈んでいた。

報告を聞いた兵たちは、「あごらしい」と嗤った。が、隊の采配をとる図書助は、その死がいかに壮絶なものか、説く。「呼吸が詰まって来、耳、鼻、口から水が入って、がまんも切れ神も悩乱するとき、それをふみ超えて溺れ死ぬというのはなみたいていのことではない」「今日の勝ち戦は小弥太のたまものといってもよいだろう、そして戦場にはいつも、こういう見えざる死が必ずある、おのれを殺して味方を勝ちに導く、しかも人の目にはつかない、……」

ほかの作品もそうだが、周五郎は、戦闘における勝敗よりも一番槍や兜首など手柄を誇る、賢しさを嫌ったようだ。オレが、オレが、という「我執」への拘泥を見逃さなかった。それらを、これらの作品のなかでは「武士」「もののふ」の取るべき態度ではないと否定している。そして、日常、ふだんの過ごし方、立ち居振る舞い、にそれが貫かれることを説いた。

「さむらいの鍛錬は家常茶飯のうちにある、拭き掃除、箸の上げ下ろし、火桶への炭のつぎ方、寝

ざま起きよう、日常些末なことのなかに性根の鍛錬がある」(「ゆだん大敵」とは、あるいは戦場で語られるにわか仕込みの「さむらい」への根本的な疑義でもあらう。

考えてみれば、それは人としてどう生きるか、にも通じることのように思われる。

「水の下……」の小弥太は、スパイ扱いされた娘に蘆束の匂いを嗅いで逃がしている。どこに根を張ってどのように生きているか、蘆束の匂いが教えたのである。「壺」の七郎次は、土を掘り返せば草の根を絶って抛り投げ、瓦礫を片寄せ、あとには畑が作られていた、というところにも、同様の周五郎の人間観、人生観がうかがえる。裏返えば、それをひっくり返してはいないか、という反問が聞こえるのである。鋏を銃に持ち替えさせてはいけないのである。

さらに重ねていえば、「石ころ」でも「一人にはあらじ」でも、説かれるのが、勝敗のまえに個人の優劣、競争などいかほどのものでもない、という点である。これは少し注目していいことではないかと思う。この戦は、勝ったのか、負けたのか。負けて、オレが一番槍など手柄自慢するなど、もつてのほかという言である。当て擦ったわけではないだろうが、太平洋戦争中の帝国軍隊は敗戦の将に「感状」を送った例は少なくない。もちろん、周五郎は穿った見方をされないよう、勝つために命を惜しむな、生きて奉公せよ、と筆を運んでいる。それがなめらかであればあるほど、心底に吹き荒れる風の強さを思わざるをえないのである。

そのように、戦場と武士のありように材を得たものとはいえ、「大和魂」なる「精神」に大きく煽られていた戦争末期の発表であれば、気配にも戦争への嫌悪、忌避を浮かべてはならなかった。周五郎の文章は隅々まで注意を怠らず、国に殉ずる精神、行動を読者が素直に読み取るよう綴

っている。しかしにもかかわらず、これらの作品からは「死」に対する「生」がたちぼのつてくるのである。それが言い過ぎなら、そのようにも読めてしまうのである。

「挙国一致」しか許されなかったあの時代に、どちらにも読めるものを書くことがいかに難しいことであったか。周五郎はその粒々を語ることはなかった。ただ作品だけが、「戦場」や「武士」に似つかわしくない、「生」や「命」といったもう一つのテーマを、そして作家の思想を、語りかけてくるのである。

戦後八〇年の今日、戦争の時代にそういう作家がいたことを思い返すことは決して無意味でないように思われる。